HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	円地文子研究［全文の要約］
Author(s)	齊田, 春菜
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16560号
Issue Date	2025-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95727
Type	doctoral thesis
File Information	Haruna_Saida_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　齊　田　春　菜

学位論文題名
円地文子研究

本論文の観点と方法

本論文は、円地文子（一九〇五年（明治三八年）―一九八六年（昭和六一年））の文学作品を分析することを目的としている。構成は三部からなり、各部では円地の作品を「少女小説」（第一部）、「女性表象と語り／翻訳」（第二部）、「老女もの」（第三部）というテーマに基づいて分類し、物語を語りなおしという視点から考察を行う。ここでいう物語の語りなおしとは、円地が過去の物語を再構築したり、自作の中で新たな解釈を加えたりする手法を指す。例えば、円地は『源氏物語』の全訳を行い、また古典文学を自身の作品に取り入れていた。この語りなおしの視点は、円地の作品を研究する上で非常に重要であり、有効な方法であると考えられる。

研究方法としては、円地の作品を「少女小説」（第一部）、「女性表象と語り／翻訳」（第二部）、「老女もの」（第三部）のテーマに即して分類し、それぞれを語りなおしの視点でゆるやかにまとめる。さらに、各テーマで扱う作品においては、少女像、巫女像、老女像といった女性像に注目し、イメージの変遷や連続性を考察した。一見すると異なる年齢層や役割を持つこれらの女性表象が、円地の作品、特に第三部で扱う「老女もの」においては、ゆるやかに繋がり合っていることを示し、それを作品の解釈に活かした。あわせて、各部におけるテクスト同士の相互関連性についても検討を行った。

本論文の内容

本論文は序章と終章、付録を除いた全一三章からなり、三部構成となっている。

序章「円地文子研究の現在と本論文の問題設定」では、これまでの円地文子研究とその評価を概観し、また、本研究のテーマの重要性と円地研究の課題を結びつけて、本論文の前提を明確にした。一「円地文子研究の現在」では、先行研究を以下の四つのカテゴリーに分類し、整理した。具体的には「（１）研究書と二〇〇八年以降に執筆された博士論文について」、「（２）代表的な作品群と代表作品以外の作品群に関する研究について」、「（３）「老女もの」および円地作品のジャンルに関する研究について」、「（４）古典受容に関する研究について」である。二「本論文の目的と方法――本研究のテーマと円地文子研究の課題」では、本論文の目的を達成するために、各部で扱う作品がどのような語りなおしを行っているか、そしてそれらをどのように分類するのかについて、以下のように詳述した。「（１）「少女小説」――円地文子研究の課題（Ⅰ）」、「（２）「女性表象と語り／翻訳」――円地文子研究の課題（Ⅱ）」、「（３）「老女もの」――円地文子研究の課題（Ⅲ）」である。この過程を通じて、円地研究における課題についても考察した。三「本論文の構成と概要」では、本論文の構成と各章の概要について説明した。

第一部「「少女小説」研究」では、少女小説作品について考察を試みた。具体的には、二〇作品以上（「付録一　円地文子少女小説目録」を参照）ある円地の少女小説のうち、先行研究でタイトルは紹介されているが内容が紹介されていない作品、または単行本化されておらず確認が難しい作品群などを選び、八作について詳細なあらすじをまとめた。そして、現状の調査に基づき、語りなおしという視座から興味深い作品を各章ごとに取り上げ、分析を行った。最後に、現段階の調査で明らかになった、最も多くの円地の少女小説が掲載されていた少女雑誌『少女サロン』と、

そこに長期連載されていた円地の少女小説三作の考察を試みた。

第一章「円地文子の少女小説の基礎的研究――戦後から一九五〇年代の少女小説研究との関係も踏まえて」では、新たに作成した「付録一　円地文子少女小説目録」を基に、円地が少女小説を執筆した活動をまとめたり、いくつかの円地の少女小説の概要を紹介したりして、その内実を明らかにした。また現在の少女小説研究の成果を整理し、円地の少女小説との関わりについて言及することで、円地の少女小説とその執筆時期における少女小説に関する基礎的研究を行い、戦後の円地の少女小説を論証する意義についての輪郭を描く作業を試みた。

第二章「「富士のある窓」・「麗わしき母」論――未完の少女小説の語りなおしによる少女小説の枠組みの獲得」では、「麗わしき母」がどのように「富士のある窓」から変容したのかを考察した。そして、この考察を通じて、円地が「富士のある窓」から「麗わしき母」において「母子もの少女小説」の枠組みを利用したことを明らかにした。

第三章「「秋夕夢」における少女小説の枠組みと逸脱――初出と初刊の比較を軸に」では、第二章で活用した枠組みをどのように戦略的に用い、分かりやすく逸脱した形で位置づけられる円地の特異な少女小説を、「秋夕夢」の初出と初刊の比較を通じて分析し、明らかにした。その結果、初出と単行本の差異は、少女の成長と永遠の少女性といった問題を浮き彫りにするものであると結論づけた。

第四章「「あほうどり」における少女小説の枠組みと逸脱――「信天翁」との比較を軸に」では、少女小説「あほうどり」と一般作の「信天翁」を比較し、二作に共通する挿話の特徴を考察し、少女小説と一般作の特徴の一部を明らかにした。「あほうどり」では、実母との再会という「母子もの少女小説」の枠組みを利用しつつ、物語の構造において重要なのは挿話であることを確認した。その挿話を検討することで、一概に娘が母親に抑圧されているとは言えないあり様が語られていることを明らかにした。

第五章「『少女サロン』における円地文子」では、円地の少女小説を最も多く掲載した少女雑誌である『少女サロン』を通じて、この時期の円地の活動を再評価し、彼女の少女小説の一側面をとらえ直すことを目的とした。また、限定的ではあるが、円地を通じて『少女サロン』という少女雑誌と円地との関りについて明らかにする試みも行った。

第二部「女性表象と語り／翻訳」では、円地のテクストの中で、日本の古典文学作品との繋がりがある作品、または、女性が書くことを主題とした作品を中心に選択し、検討を試みた。なお、日本の古典文学作品との関係が深い作品を扱う際には、女性登場人物における翻訳という要素にも焦点を当てた。さらに、「巫女的女性」というイメージにも留意した。これらの諸作品の分析を通じて、物語と女性との緊張関係について、各作品の内実を確認した。

第六章「「妖」論――女性と物語（Ⅰ）」では、「妖」について考察し、本作がどのように日本の古典文学作品を下敷きにしたのか、また女性と物語の関係をどのように描き、そこからどのような意味を引き出そうとしたのかを明らかにした。さらに、これまで夫から影響を受けていた女性が、自作の物語を通じてその立場を逆転させつつあることを示し、その変化が物語全体にどのような意味を持つのかを考察した。

第七章「「二世の縁　拾遺」論――女性と物語（Ⅱ）」では、「二世の縁　拾遺」に挿入されている作中の口語訳「二世の縁」との関係を再考し、先行研究とは異なる解釈を試みた。その解釈とは、里の主人や村人たちが定助に解釈を押し付け、それによって倒錯的に定助の性的イメージが構築されたというものである。具体的には、定助の性のイメージが他者の視点によって歪められる過程を追った。この論証を通じて、語り手の「私」の語りが分裂し、二重化していくあり方についても確認した。

第八章「『女面』論――女性たちの「企み」の物語」では、円地作品における重要なモチーフである巫女表象に着目し、『女面』を考察した。本作における「巫女」や「巫女的」な女性の表象の内実を、主に三重子と泰子の関係を通じて検討した。その結果、本作は女性たちの「企み」に重点があり、その「企み」の成就によって、表面上は家父長制に従いながらも、栂尾家の父系の純血を母系の血によって穢す物語となっていることを明らかにした。

第九章「『なまみこ物語』論――女性の語りの二重性をめぐって」では、『なまみこ物語』を語り手の「私」と、憑かれる女性であるくれはについて考察を試みた。先行研究でも解釈が分かれているくれはの偽招人表象についての解釈の揺れを生産的に捉え、円地のほかの作品とも関連づけて論じた。

第一〇章「「遊魂」・「交配花」試論――『源氏物語』現代語訳との関係から」では、円地文子が『源氏物語』の全訳中に執筆していた諸作品のうち、「遊魂」と「交配花」を分析した。この二作の分析を通じて、『源氏物語』現代語訳という一種の翻訳行為や物語を語りなおすという営為が創作からどのように読み取れるのか、その一側面を示した。

第三部「「老女もの」研究」では、第一部で論じた少女小説の中の少女というモチーフが、第二部「女性と語り／翻訳」を経て、どのように「老女もの」における中心的な表象である老女たちと関係を築いているのか、あるいは築こうとしているのかを検討した。具体的には、『源氏物語』現代語訳の最中や、それ以降に執筆された「老女もの」の中で、少女が重要な役割を持つ作品群を分析し、これまで老女たちを中心に論じられてきた円地の「老女もの」における少女のイメージを掘り起こした。その上で、諸作品や老女との関係を通じて、少女と老女がどのように意義付けられるのかを明らかにした。

第一一章「「蛇の声」論――老女と少女たち」では、「蛇の声」の中で、これまで十分に検討されてこなかった重要な表象である少女についての表現を掘り起こし、それによって「蛇の声」の新たな側面を明らかにした。具体的には、少女の中に「老い」を見出し、反対に老女の中に「若さ」を見出すようなイメージの喚起を通じて、いわゆる「老女もの」に少女という要素が組み込まれていく萌芽的な作品として「蛇の声」を論じた。

第一二章「「猫の草子」論――老女と少女、そして動物」では、「猫の草子」の作中作である画帳「猫の草子」がどのように生成されたのかを考察し、孫の少女がこの過程において果たす役割の重要性を明らかにすることを目指した。特に、老女と少女の関係が既成概念を覆す力を持つことを探り、これが「私」の語りに与える影響を考察した。

第一三章「『彩霧』論――老女と巫女そして少女」では、『彩霧』の老女に着目しつつ、そこから発展させて少女に焦点を当て、先行研究が老女にのみ注目していた解釈を超えて、本作の新たな解釈を試みた。具体的には、紗乃が斎院や悠紀子に憑依されながらも、別の斎院を語りなおそうとする創造性を本作から読み解き、さらに、ほかの登場人物たちが紗乃を中心とする「斎院」の物語に感染していく過程を明らかにした。

終章「本論文の成果と課題」では、研究の成果をまとめ、各章の概要と今後の課題を示した。本論文での議論を振り返るとともに、今後の課題を提示した。一「本論文の成果と各章のまとめ」では、本論文で展開した議論を各部ごとに再度まとめ、その成果を確認した。二「今後の課題」では、本論文の成果を踏まえ、それに基づいて必要とされる議論の展開について、今後の課題を示した。

付録は、一から三まであり、これらすべてが第一部「「少女小説」研究」に関係する資料である。付録一「円地文子の少女小説目録」では、現段階での調査により明らかになった円地の少女小説作品を、発表された順に整理した。付録二「『日本少女』（小学館）総目次と解説」では、円地の「富士のある窓」を掲載していた『日本少女』の総目次と、その内容についての解説を行った。付録三「円地文子『少女サロン』（偕成社）連載三作における主な読者からの反応――「荒野の虹」、「あの星この花」、「白百合の塔」」では、円地の「荒野の虹」、「あの星この花」、「白百合の塔」に寄せられた読者の投稿をまとめた。